

先人の足跡 3

— 強固な意志と勇氣 —

栗林 忠道大將

教育問題プロジェクトチーム

原田 太郎 陸士 61

大東亜戦争の終戦に近い昭和20年の2月から3月にかけて行われた硫黄島の戦闘で、日本軍の守備隊は海空の掩護も途絶えた状況のもと、洞窟と掘削した地下道陣地とに拠つて、上陸した米軍にゲリラ的な出撃を繰り返し出血を強要、5日で占領すると米軍司令官がうそぶいた同島で約1カ月間の敢闘の後、我を上回る損害を米軍に与えながらほぼ全員が戦死しました。

島を守備した小笠原兵団長兼第109師団長で、最後の総攻撃の先頭に立つて突撃した栗林忠道中将(当時)は、強固な意志をもって事に当たり、日頃から意志が無ければ何も成すことは出来ない、と部下を指導しました。

同島への着任にあたっては、日本本土への米軍の来攻を、たとえ一日でも遅らせようとする強烈な意志と勇氣を部下に徹底させるため、「敢闘の誓」を全軍に配布しています。

敢闘の誓

一、我等は全力を振つて守りぬこう。
二、我等は爆薬を抱いて敵の戦車にぶつかり之を粉碎しよう。

三、我等は挺身敵中に切込み敵を斬りたおそう。
四、我等は一発必中の射撃によつて敵を撃ち仆そう。
五、我等は敵十人を仆さなれば何があつても死なない。
六、我等は最後の一人となつても「ゲリラ」によつて敵を悩ませよう。
この「誓」は、「せよ」ではなく「しよう」の形で意志を共有する形となつていきます。

中将は自ら「今日あるは母の御陰」と語つていられるように厳格な母に育てられ、青少年時代には将来海外に出て活躍する途を志し、長野中学を卒業し先生にすすめられて陸軍を志願。1914年(大正3年)12月に騎兵第15聯隊で少尉に任官しました(陸士26)。

1918年(大正7年)中尉に昇進して騎兵学校に入校の直後、誰にも手なすけることが出来なかつた荒馬の「典渡」号を割り当てられて乗馬することにになり、何度振り落とされようと繰り返しがみつき、遂には馬の方が根負けしたか、騎乗する栗林中尉に従うようになりました。勇氣ある新進の騎兵将校として当時有名な話です。

1919年(大正8年)6月偕行社記事に、『国民思潮ノ推移ト軍隊精神教育ニ就テ附吾人将校ノ覚悟』

と題するB6版、約13頁の論説を發表しています(1頁約1千字)。その冒頭に「ドイツが降伏し、全世界が巻き込まれた第1次世界大戦が漸く終つて講和会議の開催に至つたことを、我々は心から喜んで祝うものであります。今や、ややもすれば世界の人の心を取り込もうとする動きがあるのは大変心配なことであります。規則やしきたりが緩んでしまつて秩序も乱れています」と述べ、今までになつた思想や主義が軍隊に持ち込まれ、秩序を崩壊させる恐れがあり得ることを強く警告し、徹底した現場主義でこの事態に対する対策を論じています。要

点は、
第一、第二、(略)
第三 現時及将来に処する将校の覚悟
1 人格の修養と実力の養成
イ 人格の修養について

世人が南洲翁を常に敬慕するのは実に彼が高潔円熟の人物であることによるのであつて、乃木將軍・橘中佐も全く同様です。高潔なる人格の大切であることを切に感ずる次第です。

口 実力の養成について
軍事知識の増進。「単に敵めしい軍服を着て態度を莊重にするだけで、唯機械的に軍紀、秩序、服従と教えたりするだけで」は、今日の時勢に合うものではありません。

常識を涵養する軍務に精励させられれば軍事以外に眼を向ける必要はないとするようなことでは、自分で軍事以外の常識に欠くるところを作つてしまふ様なもの。

2 仁 義 (略)
3 礼 儀 (略)
4 率先躬行(活模範) (略)
5 質素勤儉 (略)
第四 結 論

ロシア革命の主因は民主或は自由思想が軍隊内にも侵蝕し、軍人が本来の態度と義務的觀念を全く失つたからです。我々は自身の本来の態度を護つて社会の妄想を打破し、中堅となつて国民を率い国運の進展を図らなければなりません。

と自らの意志を論じています。
1923年(大正12年)陸軍大学校卒業、1928年(昭和3年)米國に留学し、ハーバード大学で語学、米國史を聴講、翌年第1騎兵師団の駐屯するテキサスに移つて隊付その他の軍事研究に励み、自動車を購入して自ら各地を視察しています。昭和5年に帰國し、同6年に初代のカナダ駐在武官に任命され8年に帰國しています。在米中に接した米國人の国民性に加え工業生産能力その他の觀察、調査、生活体験等が加わつて対米戦争は絶対不可の洞察が出来上がつて行つたものと思わ

栗林 忠道

陸軍騎兵中尉

れます。帰国後は各方面に米國を侮ることは出来ない実情を説明して理解を求める努力を重ねました。栗林夫人も大将から「アメリカとだけは戦争をしてはいけない」と後年何度も聞かされています。残念ですが当時は、「一少佐による、それまでにはなかつた内容の米國の実情報告」が注目されることはほとんどありませんでした。

1937年(昭和12年)に騎兵大佐、陸軍省兵務局馬政課長。折しも支那事變が勃発し、大陸への進出で多数の軍馬が必要となり、兵士と共に活躍する軍馬を讃え、育馬の大切さを國民に知らせる目的で作られた映画(筆者の記憶で高峰秀子主演「馬」)の主題歌、今も歌われる「愛馬進軍歌」の歌詞と作曲が募集されました。課長は歌詞の選定委員となり、第1節の歌詞の内「執つた手綱に血が通う」の部分は當時の栗林課長によるといわれます。

1943年(昭和18年) 8月に陸軍中将留守近衛第2師団長に親補されています。

1944年(昭和19年) 5月27日、新編第109師団長、赴任に当たり夫人には行く先を告げず、静かに「今度は骨も帰らないかもしれないよ」と言い残して出発したと伝えられています。6月9日に出発して父島の第109師団司令部に着任。22日には飛行場の適地があ

り自ら米軍の来攻正面と確信した硫黄島に、司令部と師団主力を移しました。マリアナ諸島と東京の間、東京から約1300kmの同島が陥れば、米軍の攻撃が一挙に本土に及ぶことになり

ます。

中将は着任後、直ちに全島を一人で歩いて視察しています。今後の作戦に必要な島の細部を自分で確かめたものと思われ

ます。

硫黄島は南に摺鉢山(169m)、北に元山台地があるほかは火山の堆積物で覆われた起伏の多い平地、井戸水は塩分が多いため、飲料水は雨水に頼るほかはなく、将兵を悩ませました。

既に海空の掩護のない中、栗林中将は守備の方針として、敵を上陸時に撃滅するための水際陣地は排し、南の摺鉢山、北の元山台地、多数の洞窟あるいは地下陣地間に地下連絡路を造り、上陸した米軍と陣地戦で戦って出血を強要し持久することを決めました。

この方針を実行するために、強烈な意志で根強かつた反対論を説得し、あるいは反対する者の更迭によって方針を徹底させ、団結を図ります。1944年の秋以降、更迭は旅団長、參謀長、作戦參謀、大隊長2人に及び、最も優秀な歩兵団長をとの求めに大本営が派遣して来たのは、同期の千田貞季少将(仙台陸軍幼年学校長)でした。

島の地熱は平地で60度位あり、亜硫酸ガスの出る中で地下道を掘るために、兵士たちはマスクを使用し20分位で交代しながら上官に対する敬礼も免除され、爆撃の間隙を縫って掘削を進めました。掘り進むに従い土砂の搬出も困難を極めます。

砲爆撃に耐えるため陣地及び地下連絡路の深さは約20m、訓練の合間に兵士達は総延長28kmを目標に、掘りに掘って、18kmが完成した2月16日、敵の来攻を迎えます。

このときの砲撃は日本軍が経験したことのない熾烈なもので、その状況を大本営に理解させようとした報告があります。(參謀長名)の3月7日参電329号の末尾に、

「:敵の本日迄の発射弾数は約30万発と推定せられ水際陣地を始め陣地施設は主として之により潰滅す以上之迄の戦訓等にては到底想像も及ばざる戦鬪之生地獄的なるを以て泣言と思わるるも顧みず敢えて報告す」

米軍は2月19日、南海岸に上陸を開始しました。将兵は砲爆撃に耐えた連絡路によって洞窟陣地及び地下陣地からの奇襲攻撃を繰り返し、戦鬪の終わるまでに米軍の戦死傷者計2万2677名で、日本軍の戦死者2万1900名を上回る損害を米軍に与え、硫黄島は米軍の損害が日本軍のそれを上回つ

た稀有の戦場ともいわれています。

生地獄的と報告された砲撃を浴びた後にこれだけの戦いが出来たのは1日でも長く持久して敵の本土への進攻を遅らせるという中将の強い意志と、これを共有した将兵の意志と勇氣とによると思われ

ます。3月29日(戦死昇任)、栗林中将は特旨をもって大将に親任されました。

将兵は「敢鬪の誓」の通りに戦い、折に触れて唱和しながら最後まで所持していたといわれ、戦鬪が終わった後、米軍により塹壕、洞窟、トンネル、トーチカ、戦死した日本軍兵士の遺体など、到るところで「敢鬪の誓」が書き写された書面や手帳が発見されています。

一兵でも多くの敵を倒し、一日でも長くこの島の持久を命じてきた栗林大將も、3月16日、大本営に対し今や有名になった3首の辞世の歌を末尾に付したお別れの電報を発信しました。

「戦いは最後の段階になりました。敵来攻以来部下將兵の敢鬪は鬼や神も涙する程に勇ましく立派なものです。」

(中略)

本島を奪い還さない限り本土は永遠に安泰となることはないことを思い、例え魂となっても必ず日本軍が捲き返す時の先頭に立つことを誓います。

17日、兵団の総攻撃を前にして全軍に布告。

一、戦闘は最後の段階になった。
二、兵団は本十七日夜、総攻撃を決行して敵を打ち破る積りである。

三、各部隊は本夜中に時に各の当面の敵を攻撃、最後の一兵となっても飽く迄死を覚悟して敢闘せよ、振返ってはいけない。

四 自分は常に皆の先頭に居る。

米軍の包囲の中で戦機を待ち、3月26日午前5時頃、生き残っていた約4百名の日本軍が、栗林中将を先頭に米軍の海兵隊、陸軍航空部隊の野営地を襲撃し、約3時間の激烈な戦闘を交えほとんど全員が戦死しています。米軍の損害は戦死59名、戦傷119名であったと言います。階級章ほか全ての位階を示す表示を外し、突撃した中將のご遺体は発見されていません。

軍司令官を先頭に最後の攻撃を行った例は、小笠原兵団のほかには恐らくないと思われまます。

戦闘が終わり、直ちに米軍は日本軍戦死者の遺体を全て埋めてその上に滑走路を作りました。B29の護衛として、硫黄島から初めて戦闘機P51が来攻したのは4月7日の正午頃でありました

(この日、当時の陸軍予科士官学校、現朝霞駐屯地も被爆)。

平成6年2月、初めて慰霊のため硫黄島を訪ねられた天皇后陛下の御製と御歌。

天皇陛下御製

精魂を込め戦いし人未だ

地下に眠りて島は悲しき

皇后陛下御歌

慰霊地は今安らかに水をたたふ

如何ばかり君ら水を欲りけむ

参考文献

・『偕行』 大正8年6月号

・栗林大將関係資料 靖國偕行文庫

・『栗林忠道からの手紙』

講談社 講談社ブック

・『散るぞ悲しき』

新潮社 梯 久美子著